OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『パンセ』原稿と写本および校訂について : 研究の現状 |
| Author(s) | 山上, 浩嗣 |
| Citation | Gallia. 2019, 58, p. 29-38 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/72868 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『パンセ』原稿と写本および校訂について：研究の現状 [1)]

山上　浩嗣

『パンセ』の校訂には約 350 年の歴史があり、さまざまな試行錯誤と発見を経て、現在では、残された肉筆原稿集と 2 つの写本に依拠して作業を行うことが当然とみなされている。だが、2 つの写本のいずれを底本とするか、写本における断章の配列順序にどの程度パスカルの意図を認めるか、『パンセ』のどの部分が『キリスト教護教論』（以下『護教論』）に組み込まれることになっていたのか、といったさまざまな重要な問題について、研究者の間で完全な合意を見ていない。それどころか、近年ますます多くの新説が提示されるようになってきている。今日『パンセ』の校訂方針の決定には、さらなる慎重さが求められる状況にある。

本論では、『パンセ』成立の事情に関する過去の主要な研究を参照し、本作校訂の際の諸課題を提示する。第一にこれまでの『パンセ』校訂の歴史を概観し、第二に両写本の異同と成立の順序についての有力な仮説を紹介する。第三に終生『パンセ』校訂に取り組んだが、未完のまま 2016 年に逝去したジャン・メナールの校訂方針を確認し、最後に近年の多様な研究動向を見ておこう。

## 1.『パンセ』肉筆資料と校訂の歴史 [2)]

『パンセ』に関する現存の主たる肉筆資料は、「第 1 写本」（*La Première Copie des Pensées*, 以下 *C1*）と「第 2 写本」（*La Seconde Copie des Pensées*, 以下 *C2*）、ならびに「『パンセ』肉筆原稿集」（*Recueil Original des Pensées*, 以下 *RO*）の 3 つである（いずれも電子図書館 Gallica 上で閲覧可）。

甥のエティエンヌ・ペリエによると、パスカルの遺稿は、複数の紙片を綴じたいくつもの束からなっていた。だが、それらのファイル相互にも、各ファイルに綴じられた断章相互にも、いかなる秩序も連続性も認めがたく、かなりの癖字のため解読も困難であった。近親者たちは、ともかく遺稿を発見時の状態のままで筆写させることにした [3)]。現在 *C1* と *C2* という、同じ筆跡の 2 種類の写本の存在が知られている [4)]。また、エティエンヌの弟ルイ・ペリエは、母ジルベルトの死

1）本稿は、2018 年 8 月 4 日開催、第 4 回「フランス近世の〈知脈〉」研究会（大阪大学豊中キャンパス）における発表原稿に加筆を施したものである。本稿執筆に際しては、湟野正満氏（京都産業大学教授）から貴重なご助言を得た。記して感謝申し上げる。また本稿は JSPS 科研費 17K02594 による研究成果の一部であることを付記する。

2）本章と第 2 章の記述は、主として Mesnard 1971 と Proust 2010 をもとにしている。また、以下で言及する『パンセ』各版の書誌データ詳細については、前田 1980, p. 251-254 を参照。

3）Voir « Préface » pour l'édition Port-Royal des *Pensées*（1670）, in *PR*, p. 47-48 ; 塩川訳『パンセ』（下）、p. 243-244.

4）*C1* は単独で一巻をなしているが、*C2* は、ノエル神父との書簡や『恩寵文書』などを含む、パスカルに関わるさまざまな文書（筆跡も用紙もばらばら）の集成である *RC2*（Recueil

（1687 年）を機にパスカルの遺稿を受けつぎ、1711 年、その原物の散逸を防ぐため、それらを約 500 ページの大型台紙に順不同で貼り付けた。これが *RO* である[5]（なお、*RO* として整理される前の状態の遺稿を *O* と呼ぼう）。

『パンセ』の初版（通称「ポール＝ロワイヤル版」）の刊行は、それに先立つ 1670 年である（ただし前年に、主立った人物に配布し承認を得るために、少部数のプレオリジナル版が刊行されている）。近親者とポール＝ロワイヤル修道院に連なる友人たちが集い、熱心な議論を経て編集された。結果、読者を刺激しすぎないようにとの配慮から、パスカルの原文に大幅な変更が加えられた。1678 年に、約 40 の断章が加わった増補版が刊行。1776 年のコンドルセ版、1779 年のボシュ版、1812 年のルヌアール版などがこれに続く。ここまでの版のテクストは、すべて 1678 年のポール＝ロワイヤル増補版とほぼ同じである。

1842 年、哲学者のヴィクトル・クーザンが、アカデミー・フランセーズにおける演説で、従来の『パンセ』刊本が *RO*、*C1*、*C2* という現存する手稿資料に依拠していないと告発する。以後校訂者たちは、この告発を無視できなくなる。1844 年の P・フォジェール版は、テクストは *RO* に依拠しつつ、断章を『護教論』に関係するか否かの 2 部に分けて配列したが、写本の利用は *RO* 解読に役立てるためと、*RO* に不在の断章の採録のためにとどめた（写本における断章の配列順序については分析せず）。1852 年および 1866 年の E・アヴェ版は、フォジェール版のテクストとボシュ版の配列を採用した。G・ミショー（1896 年）と L・ブランシュヴィック（1897 年）は、ポール＝ロワイヤル版の序文でエティエンヌ・パスカルが言及しているパスカル遺稿（*O*）の写本[6]はすでに失われ、*C1* は同版の編者たちが作成したものと考えた。ミショーは「無秩序」であることを承知で、*RO* に従って断章を配列した。一方ブランシュヴィックは、断章を独自のテーマ別に分類して配列したが、この配列はその明快さにより、今日に至ってもなお好評を博している。本版は、1904 年に「フランス大作家叢書」に収められ、パスカルが名実ともにフランスを代表する文学者とみなされるきっかけになった。

1938 年、Z・トゥルヌールは、ブランシュヴィックとは反対に、*C1* こそがエティエンヌ・ペリエが作らせた写本そのものであると結論するが、写本を体系的には扱わず、ところどころ根拠なく順序を変更してしまう。また、トゥルヌール

---

comprenant *C2*）と呼ばれる資料の一部。*RC2* は、18 世紀半ばに、クレルモンのオラトリオ会修道士でパスカルの姪マルグリット・ペリエの友人であったピエール・ゲリエが作成。J・メナールは、*RC2* のうち *C2* 以外の部分は『パンセ』とは区別すべきであり、たとえば S771-L974（本稿では『パンセ』の断章番号はセリエ版 S とラフュマ版 L に従って示す）などを『パンセ』に含めるのは誤りだと述べている。Mesnard 1971 を参照。

5）ルイ・ペリエは、ポール＝ロワイヤル版『パンセ』（1670 年刊）に未収録のパスカルの草稿約 40 枚を発見し、*RO* に加えた（1A ～ 27DD と番号が振られている）。また、彼は、『幾何学的精神』『恩寵文書』『罪人の回心』などのほか、「切り離された断想」の標題のもとに二組の断章群を収めたパスカル未刊資料の集成である、いわゆる「ペリエ写本」（*Manuscrit de l'abbé Périer*）を作成し、*RO* とともにパリのサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院に寄贈した（1711 年ごろ）。「ペリエ写本」の現物は紛失したが、のちサント＝ブーヴが所持していたそのコピーが現存している。Mesnard 2013, p. 585-586 を参照。

6）*PR*, p. 48 : « La première chose que l'on fit fut de les [= *tous les écrits de Pascal*] faire copier tels qu'ils étaient dans la même confusion qu'on les avait trouvés. »

1942 年版（édition paléographique）による *RO* のテクストの解読はきわめて正確で有益である。1948 年、P-L・クーシューは、ポール＝ロワイヤル版『パンセ』序文に現れる「束」（liasses）という語が、複数の紙片の余白に針で穴を空け、糸で結んだまとまりを指すことを解明し、その「束」のそれぞれが、*C1* の各章に対応していることを発見した（*RO* の随所にその穴が見つかる）。

さて、1947 年、L・ラフュマは、『パンセ』の 2 つの写本が、パスカルの遺稿（*O*）の配列順序を反映しているという事実を明らかにする。どういうことか。両写本は同一人物によって作成されたものとみられるが、相互に若干の違いがある。*C1* は 61 章からなり、*C2* にはこれに短い 1 章が加わる。それを別にすれば、両者の各章に含まれる断章とその順序は同じであるが、章の配列はかなり異なっている。ところで、*C1* の冒頭 27 章のそれぞれにはタイトルが付いている。このタイトル付きの 27 章に関しては、*C2* でもまったく同じ順序で並んでいる（*C1* と *C2* の異同についてはのちに詳述）。しかも両写本には、この共通部分の章のタイトルを章の配列順に記した「目次」（後掲図版参照）のようなものが含まれているのだ。ラフュマは、この「目次」が、パスカル自身が考案した『護教論』のある時点におけるシナリオであり、両写本におけるタイトル付きの各章はその章で論じられる予定だった内容に合致する断章を含んでいると推定した。そこで彼は 1951 年、初めて *C1* に基づいた『パンセ』校訂版を刊行し、最初の 27 章分を「分類済みの紙片」、残りの 34 章分を「未分類の紙片」と大別した。その際、*C2* は *C1* の写しであるとみなした（後述のようにこれには異論もある）。ラフュマの仮説は、現在も大筋において支持されており、とりわけタイトル付きの 27 章が『護教論』の（少なくとも暫定的な）構想に密接に関連するという点については、研究者間でほとんど異論がない。ラフュマ以後の『パンセ』編者のほとんどが写本に基づいて校訂作業を行っている。ただし、Ph・セリエは、両写本の比較検討ののち、*C2* のほうが第三者の書き込みの跡が少なく（*C1* にはポール＝ロワイヤル版編者によるメモ書きが多数認められる）、分冊して閲覧された形跡がないなどの理由から、*C2* が *O* の順序により忠実であるはずだと結論づけ、こちらを底本として採用している（1976 年、以後改版多数）。一方、M・ルゲルンは、タイトル付きの 27 章を冒頭に置く *C1* の配列をより合理的であるとみなし、こちらに依拠した（1977 年、2000 年）。

## 2. 2 写本の特徴と成立順序

### 1）*C1* と *C2* の特徴

*O* においては、上述の「束」だけではなく、ノートや紙片など、さまざまな形で複数の断章がまとめられていたことが知られている。これらひとつひとつの断章群のことを、以後はメナールに従って「単位」（unité）と呼ぶことにしよう。

① *C1*：2 部からなる。第 1 部は、上述のように、「目次」に記されたタイトルが付された 27 の単位からなる（「目次」には実は 28 のタイトルが記されているが、そのうち «La nature est corrompue» というタイトルに対応する単位は、*C1* にも

*C2* にも見あたらない――これについては後述）。第 2 部は 34 の単位からなるが、そのうち 1 単位にのみ «*Miscellanea*»（雑纂）というタイトルが付されている。*C1* には同じ「目次」が 2 枚含まれていて、1 枚は第 1 部の冒頭に、もう 1 枚は第 2 部の冒頭に置かれている。各単位は 2 ～ 12 枚の用紙からなる 1 冊のノートに対応している（1 つの単位を転写し終わってまだノートに余白があっても、次の単位は新たなノートに転写されている）。メナールに従って、第 1 部の構成単位を配列順に 1 ～ 27、第 2 部の構成単位を配列順に I ～ XXXIV と呼ぼう。なお、*C1* の一部の紙の透かしと、*RO* の一部の紙の透かしが同じであるため、*C1* の成立はパスカルの死の直後であると推測される。

② *C2*： *C1* にない 1 単位（「エズラの作り話」に関する 3 断章からなる）が含まれている。これを XXXV とすると、*C2* の構成単位の配列は次のようになる：I／1 ～ 27／XXXV／XXXII ～ XXXIV／XXIII ～ XXXI／XXI ～ XXII／XX／II ～ XIX。*C2* は 1 冊 8 枚の紙からなる 35 冊のノートの集成（ただし 4 枚の紙、2 枚の紙しかないノートが 1 冊ずつある）。*C1* と異なり、*C2* では単位の始まりがノートの始まりと必ずしも一致していない。*C2* には 28 タイトルの「目次」は 1 枚しかなく、冒頭に置かれている。*C2* には写字生の筆跡とは明らかに異なるピエール・ゲリエ（注 4 参照）の筆写によるいくつかの断章が挟みこまれている [7]。さらに、*C2* には、単位 II の直前に «Preuves de la religion par le peuple juif, les prophéties et quelques discours» という文字が記されたページが置かれている（単位 II ～ XIX 全体のタイトルと思われるが、これは *C1* にも *RO* にもない）。*C2* の用紙の透かしはほとんどすべて同じで、それは *RO* の用紙のどの透かしとも一致しない。

### 2）*C1*, *C2* の生成と第 3 の写本の可能性

*C1*, *C2* には同じ転写ミスが見つかり、また、欄外に複雑な書き込みのある紙片でも、両写本でまったく同様に再現されているため、*C1* と *C2* がともに *O* から直接転写されたとは考えにくい。ところが、*C1* から *C2* が転写されたと仮定しても、*C2* から *C1* が転写されたと仮定しても、矛盾が生じる。どういうことか。

*C1* には写字生以外の複数の修正者 [8]（réviseurs）による加筆の痕跡が認められるが、たとえば単位 II の「賭け」の断章については、*C2* でこれらの加筆がすべて反映されている。また、断章 S465-L558 においては、*C1* では

> «La diversité est si ample que tous les tons de voix, tous les marchers, toussers, mouchers, esternüers.»

の一文の末尾に「+」という記号が付され、その欄外に写字生とは異なる修正者の筆跡で «+ sont differens» という語句が記されている（*RO* にはこの語句は不在）。

---

7）*C2* の p. 399-402。「単位 XVI, XXX ～ XXXI, XXI の全部と単位 XXII の一部」と同じテクストが含まれている。なお、*RC2* のなかの *C2* の直後にも、同じくピエール・ゲリエの筆写による単位 19 と同じテクストが付されている（*RC2*, p. 539-554）

8）réviseurs のなかには、写字生の筆写の誤りを修正する「校正者」と、ポール＝ロワイヤル版『パンセ』編集の際に意図的に原文を改変する「校訂者」とがいる。本稿では両者をまとめて「修正者」と呼んでおく。

*C2* ではこの語句は初めから本文に記されている。この 2 つの事例からすれば、*C1* から *C2* への転写はありえるが、逆はありえない。

一方、断章 S100-L66 においては、*C1*, *C2* それぞれのテクストはこうである。

> *C1* : « C'est pourquoy il luy faut dire en mesme temps qu'il y faut obeir aux superieurs non pas parce qu'ils sont justes mais parce qu'ils sont superieurs [...] »
>
> *C2* : « C'est pourquoy il luy faut dire en mesme temps qu'il y faut obeir *parce qu'elles sont loix comme il faut obeir* aux superieurs non pas parce qu'ils sont justes, mais parce qu'ils sont superieurs [...] »

*C1* では上でイタリックで示した部分を転写し忘れている。写字生は 1 つ目の obeir を 2 つ目の obeir と見まちがえたと推測される（この現象のことを「次の同一語までの見落とし」saut du même au même という）。この事例からすれば、*C2* から *C1* への転写はありえるが、逆はありえない。

このように、*C1* と *C2* の一方から他方への転写だけが可能な例が、双方向ともにほかにも多数見つかる（たとえば、「次の同一語までの見落とし」は、*C1*、*C2* の両者それぞれ別の場所に、約 10 個ずつ見つかる）。このことから、メナールは、*C1*、*C2* の双方が、第 3 の写本「第ゼロ写本」（略号：*C0*）から転写されたと推測した。この仮説は、現在広く受け入れられている [9]。

では、*C1* と *C2* はどちらが先に成立したのだろうか。メナールは、*C0* と *C1* が同時に作成され、校正も同時に行われたあと、その校正結果を反映する清書版の写本として、*C0* に基づいて *C2* が作られたと推測している [10]。実際、*C2* には文字を解読する際のためらいの跡が見られず、文字は大きく、タイトルに下線が引かれ、断章同士の空間もゆったりとしている（Mesnard 1971, p. 15-16）。ただし、断章の配列順序は、*C1* と *C2* のいずれが元来のものかという点について、メナールは判断できないとしている。たしかなのは、「目次」にタイトルが記された 27 単位の順序は、パスカルがある時点において（少なくとも暫定的に）確定したという

---

9）メナールは、*RC2* に含まれるピエール・ゲリエによる単位 19 の写し（注 7 参照）を、*C0* に先立つ写本作成の最初の試みであると推測し、「これが不完全なものに終わったため、より習熟した写字生の協力が必要と考えたのだろう」と述べている。（Mesnard 1971, p. 15）。

10）この点について、G・プルーストは、およそ次のように主張している。「① *C1* と *C2* はともに *C0* に基づいて作られたが、*C0* の構造は *C2* よりも *C1* に近かったはず。② *C1* と *C2* の単位の配列順序の違いは、それぞれの成立時における *C0* の状態の違いに由来している（*C0* も *C1* と同様、単位ごとに異なるノートに筆写されていた）。③ *C0* にはいくつかの＜次の同一語までの見落とし＞が含まれているが、それらは *C0* に先立って成立した＜第マイナス 1 写本＞（*C-1*）に由来している」（Proust 2010）（この③の仮説の根拠は不十分だと思われる）。

また、湟野正満は最近の論考で、次の新説を提示している。「*C0* はパスカルの死（1662 年 8 月）の直後に成立。*C2* はベリエ家の保存用に、彼らがクレルモンに引っ越す 1664 年までに成立。他方、ジルベルトの夫フロラン・ペリエがパスカルの遺稿の出版許可を得たのが 1666 年 12 月で、ポール＝ロワイヤル版『パンセ』プレオリジナル版の刊行が 1669 年。編集作業は 2 年あまりという短期であったということは、編集に使用する写本 *C1* の作成には時間をかけられなかったはずである（*C1* がポール＝ロワイヤル版『パンセ』の編集のために用いられたことは、その多数の書き込みなどから実証されている［Proust 2010 を参照］）。そこで、*C1* には、*C0* の一部（ポール＝ロワイヤル版編集のために支障のない部分）が流用されたのではないか。ゆえに、写本の成立順序は *C0* → *C2* → *C1* となる」（Horino 2018）。

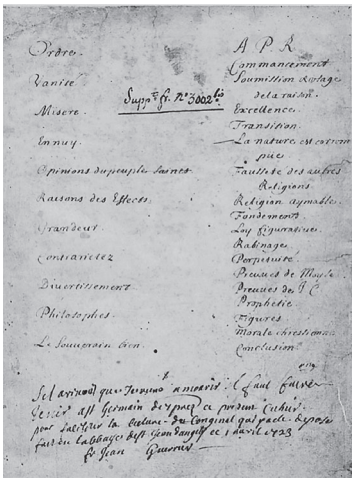
事実だけである。それ以外の単位（I ～ XXXV）の順序については、*C1* と *C2* のいずれがより正統であるとも言えない。こうしてメナールは、1971 年においてすでに、『パンセ』の校訂に際しては、*C1* と *C2* の一方にではなく、両方を考慮しなければならないと主張し、終生その原則に基づいて作業を継続してきた。それが未完に終わったのは痛恨である [11]。

### 3. メナールの発見と『パンセ』校訂方針 [12]

『パンセ』校訂に関わるメナールの重要な見解は多岐にわたる。そのひとつは、上述の「第ゼロ写本」仮説である。ここではさらに、「目次」についての彼の見解と、写本を構成する各単位の執筆時期に関する彼の考察を見ておこう。

#### 1)「目次」について

先述のように、28 のタイトルが記された「目次」が、*C1* には 2 枚、*C2* には 1 枚、それぞれ含まれている（*RO* にはない）[13]。タイトルは 2 列に分かれて記されていて、左列に 10 個（加えて 1 タイトルが抹消）、右列に 18 個並んでる。いくつかのタイトルは、写本本文の各単位冒頭に記されたものよりも簡略化された表記である（«Ennui», «Excellence», «Transition» など [14]）。




***C1* 冒頭の「目次」**

*C1* 冒頭の「目次」（図版参照）で、右列上から 6 番目のタイトル «La nature est corrompue» の先頭にダッシュのような線が引かれて強調されている。これは、このタイトルに対応する単位が写本の該当箇所にないことに対する注意、ないしは「当惑」（perplexité）を示すとメナールは述べている。その上でメナールは、この単位は消失したのではなく、単位 I の末尾の 2 断章（S35-L416, S36-L417）に対応しているのではないかと推測している。写本の S35-L416 の冒頭には «La nature est corrompue» というタイトルが記されているからだ [15]。パスカルが、1 章を構成するにはこの 2 断章では少なすぎると考えて、総合的な内容をもつ

11）メナールのパスカル全集校訂にかける多大な努力について、永瀬 2016 を参照。
12）本章の内容について詳細は Mesnard 1993 を参照。
13）湟野はいくつかの根拠を挙げて、これら 3 枚の「目次」のなかで、*C2* に含まれるものがオリジナルであると推論している（Horino 2018）。
14）それぞれ、本文では «Ennui et qualités essentielles à l'homme», «Excellence de cette manière de prouver Dieu», «Transition de la connaissance de l'homme à Dieu» である。
15）*RO* にはこのタイトルは見つからない。メナールは、もともとこのタイトルだけが記された小紙片が「束」のラベル（étiquette）の役割を果たしていて、それが *O* から *RO* を作成する際に紛失してしまったのではないかと推測している（Mesnard 1971, p. 26-27）。

単位 I に組み入れた可能性はある。この単位 I は、「目次」に示された各章の内容の概略を提示している（セリエはこの単位を liasse-table と呼んでいる）。

メナールはこの「目次」が、パスカル自身の手になるもので、その原本は失われたと考えているのに対して、セリエはこの「目次」を、写本作者によるその時点での *O* の状態の記録とみなしている（*FS*, p. 831）。ただ、いずれにせよ、この「目次」に記された 28 タイトルが、『護教論』執筆のために行われた分類を示すということについては大方の研究者が合意している。メナールはとりわけ、その配列順序を、テクストと同様に重視されるべきであると強調している [16]。

### 2）各単位の執筆・分類時期

メナールは、各単位の執筆あるいは分類時期を、パスカルの伝記的事実、断章の内容、断章の書かれた用紙の物質的特徴、断章が記す歴史的事実などを考慮して、突き止めようとしている。その推定の過程は、およそ以下の通りである。

（1）『パスカル氏の生涯』のなかのジルベルト・ペリエの証言によれば、「聖荊の奇蹟 [17]」（1656 年 3 月 24 日）に関する論争をきっかけに、奇蹟に関する諸断章（単位 XXXII ～ XXXIV）が書かれた。これら単位群には、ランジャンド神父によるジャンセニストへの敵対的な説教（1657 年 2 月 21 日）に言及する断章あり（S419-L830, S442-L878）。この単位群の執筆は、1656 年末～ 1657 年初頭。

（2）同じくジルベルトは、パスカルの奇蹟に関する考察と、フィヨー・ド・ラ・シェーズの『モーセ五書の証拠について』（1672 年）という論考との関連を示唆している [18]。ところで、*C2* にのみ所収の単位 XXXV はまさに、フィヨーが検討したモーセ五書の正統性についての考察である。ゆえに単位 XXXV の執筆は、上記の単位群 XXXII ～ XXXIV と同時期であると推定される。

（3）パスカルの思索が奇蹟以外の多様な主題にも広がる。単位 11 のタイトル «A.P.R.» はポール＝ロワイヤルでのパスカルの講演を意味する（これには異論もある）。その時期は 1658 年ごろ（エティエンヌ・ペリエとフィヨーは 1658 ～ 1659 年ごろであると示唆しているが、1659 年はパスカルは重病に苦しんでいたため）。諸断章の単位 1 ～ 27（タイトル付きの 27 単位）への分類はこれより後。

（4）単位 1 ～ 27 の諸断章の執筆（分類ではない）はおそらく 1658 年以前。単位 XXIII（タイトル «*Miscellanea*»）の諸断章の執筆も同時期。後年、おそらく両者への分類が同時になされ、後者には前者から排除された断章が集められた。

（5）パスカル晩年の聴聞師ブリエ神父によると、パスカルは死の 2 年前から護教論の執筆にすべてを捧げていたという（*Mémoires* de Beurrier, *MES*, I, p. 868）。これはクレルモンからパリに戻った時期、しかも健康をやや回復した時期（1660 年 9 月）に一致する。単位 1 ～ 27 の分類・成立は、およそこの時期と推測される。

（6）単位 1 ～ 27 の束のタイトルラベルの一部は罫線付きの用紙に書かれていた

16）Mesnard 1993, p. 53. Cf. Thirouin 2015, III, 1。
17）ポール＝ロワイヤル修道院で、パスカルの姪マルグリットの深刻な眼疾が、彼女の患部にキリストの聖荊を押し当てただけで数時間後に快癒したという奇蹟のこと。
18）G. Périer, *La Vie de M. Pascal*, *MES*, I, p. 618.『メナール版パスカル全集 1』56 頁。

が、同じ用紙が単位 I と単位 XXIV の一部の断章に使用されている。ラベルは単位への分類の仕上げのときに作られるはずなので、単位 I, XXIV の諸断章の執筆は単位 1 ～ 27 の成立より後と考えられる。

（7）単位 XXVI に含まれる S622-L750 は、クロムウェルの死（1658 年）と英国の王政復古（1660 年 5 月 25 日）に言及。また、同じ単位に含まれる S616-L735 は、1660 年 2 月 19 日付けの手紙の裏面に書かれている。後者の断章は *RO* ではジルベルトの筆跡だが、ジルベルトが記した断章は、単位 XXVI のほか単位 XXVII、XXVIII にも見られる。以上から、単位 XXVI ～ XXVIII は、1660 年以後の同時期に成立。ところで、ブレーズとジルベルトが隣接した家屋に住んでいたのは、（a）1658 年 12 月～ 1659 年 3 月（パリ）、（b）1660 年 5 月～ 8 月（クレルモン）、（c）1661 年春以後（パリ）の 3 回。（a）は早すぎるため、（b）はパスカルが病中であったのと、執筆中の原稿をクレルモンに持参したとは考えにくいために、それぞれ排除される。ゆえに、単位 XXVI ～ XXVIII は、（c）の最晩年に成立。

（8）P・エルンストによれば、単位 1 ～ 27, I, XXIII, XXIV の多くの断章は同じ透かし、同じ大きさの用紙に書かれている。これらが初期に書かれたことは明らかである。だが、（7）で最晩年に成立したと推定した単位 XXVI ～ XXVIII の一部の断章に使用されている用紙と同じ用紙が、単位 1 ～ 27 と単位 XXX でも頻用されている。また、単位 24, I, XXIV, XXX に属する一部の断章同士、単位 2 と XXX に属する一部の断章同士がそれぞれ同じ 1 枚の用紙に書かれていたことが分かっている（Ernst 1996, p. 415, 421）。したがって、『パンセ』の諸断章の執筆時期には複数の段階があるとしても、それらの間に大きな時間的隔たりはないと考えられる。

以上から、次の結論が導かれる。① 1657 年春、『プロヴァンシアル』の直後、奇蹟とモーセ五書の正統性についての考察が行われた。② 1657 ～ 1658 年、不信仰者を説得するためのより一般的な護教論が構想され、多数の断章が執筆された。③ 1658 年、ポール＝ロワイヤルでの講演で、護教論の構想が披露された。④ 1658 年 6 月以降、パスカルはルーレット問題に没頭し、護教論の執筆から遠ざかった。⑤ 1659 年初頭～ 1660 年秋、重病のため作業不能に陥った。⑥ 1660 年秋以降、小康状態のなかで、清書（ジルベルトなど別人の筆跡のものもある）、断章の紙からの切り取り、単位 1 ～ 27 をはじめとする「束」ごとの分類、さらには、新断章の執筆が行われた。メナールは、単位 II, III, IV, V（S680 ～ S690）は最晩年に書かれたと推測している。

メナールは上のような慎重な考察を経て、『パンセ』校訂に際しては、*C1*, *C2* のいずれか一方を特権視すべきでないこと、「目次」に記された単位の配列と断章の分類はパスカル本人に帰される以上尊重すべきだが、それ以外の単位の配列については写本に従う必要はなく、推定される成立時期の順に並べ替えるべきこと、を主張した。メナールは生前この方針に従ってかなりの作業を進めていたはずである。その成果が何らかの形で公開されることが望まれる。

## 4. 現在の研究と「護教論」への疑念

最後に、『パンセ』校訂に関するその他の研究動向について、略述しておこう。

これまで、いくつかの主要な断章をもとに生成研究が行われてきた。H・グイエは「賭け」の断章で執筆の複数の段階を区別し（Gouhier 1971）、前田陽一は「二つの無限」の断章の分析をもとに、「複読法」を発見した（前田 1980, p. 187 *sq.*）。湟野正満は「気晴らし」の断章の分析から、「多読法」を提唱している（Horino 2014）。L・シュジーニはより広汎なテクストを対象に、パスカルの文章の特徴を総合的に把握した（Susini 2008）。また上述のように、P・エルンストはパスカルが使用した紙の物質的特徴に注目し、一部の断章の執筆年代を同定した（Ernst 1996）。

主要な断章の『護教論』のなかの位置づけについても検討がなされている。とりわけ「賭け」の断章について、M・ルゲルンは、単位 1 ～ 27 の諸断章に先立って、1655 年ごろ、『護教論』の企図とは独立に、ロアネーズ公とその周辺の人々に向けて書かれたと述べている（*LG*, p. 1449 *sq.*）。この説は、「賭け」がパスカルの企図の中心にあるというL・ティルアンの説と対立する（Thirouin 2015, III, 6）。

また近年、「パスカルは『護教論』の執筆を企図していたが、それが未完に終わり、準備稿が遺された」という通念そのものを疑う研究も現れている。H・オープティは、パスカルの企図を apologie（護教論）と表現したのは 19 世紀半ば、ヴィクトル・クーザンが初めてであり、『パンセ』のどこにもこの語は使用されていないし、パスカルと生前交流があった近親者や友人の誰もこの語を使用していないと指摘している（Aupetit 2013）。V・カローは、apologétique（護教論）というジャンルの成立は 18 世紀末であって、パスカルにこれを当てはめるのは時代錯誤であると言う（Carraud 2013）。またL・ティルアンも、『パンセ』は護教論というよりは、「回心への道程」を示す著作だと述べている（Thirouin 2015, III, 8）。今後『パンセ』と護教論の企図との関係については、より慎重な検証が求められる。

さらに、20 世紀後半以降、『パンセ』のなかに、いかなる著作の「プラン」を認めることも妥当ではないという主張も見受けられる。L・ゴールドマン、M・ブランショ、L・マランがその代表的な論者である[19]。最近では、A・カンティヨンが、そのような立場を継承し、これまでの『パンセ』編集方針に根本的な疑念を向けている。『パンセ』を一冊の書物として提示することそのものが、パスカルの意図を裏切ることになるというのである[20]。極端だが傾聴に値する見解である。

なお、2011 年開設の D・デコットと G・プルーストによる『電子版パスカル「パンセ」』（*EEP*）サイトは、これまでの膨大な研究の成果をすべて集約しようとする真に画期的な試みである（現時点では未完）。『パンセ』の全断章について、

19）Cantillon/Tourrette 2015, p. 56-62 を参照。

20）Cantillon 2017. 要旨は次の通り。以下の点からして、『パンセ』は言表不可能な言表内容を含む：①読者の回心を目的としながら、同時に真の信仰は神からの無償の恩恵にほかならないと主張。②「真理は隠されている」という言表内容と、当の言表内容を公的に言表することとの間に極度の緊張関係が生じる。③「人々の幸福のためにこそ、しばしば彼らを欺かねばならない」という事実を暴露することにより、まさに社会秩序の破壊をもたらす。

該当するパスカル肉筆原稿および両写本の写真、その文章を（抹消された箇所も含めて）パソコン用フォントを使って転写した図版（執筆時期によって文字を色分けしてある）、ポール＝ロワイヤル版のテクストなどを示し、これまでの主要な研究をふまえて詳細な解説を付そうとしている。また、関連断章のページに飛べるように、縦横無尽にリンクが張りめぐらされている。本サイトは今後もますます充実していくだろう。

（大阪大学教授）

**参考文献（参照指示は、略号または著者名と刊行年によって行う）**


Hubert AUPETIT, « Pour en finir avec l'*Apologie*, us et abus d'une hypothèse de lecture », in *Chronique de Port-Royal*, n° 63, 2013, p. 27-44.

Alain CANTILLON, « Remarques sur la crise présente des *Pensées-de-Pascal*, et quelques suggestions pour en sortir », texte inédit pour la conférence à l'Université d'Osaka, le 8 mars 2017.

Alain CANTILLON et Éric TOURRETTE, *Pascal, Pensées*, Neuilly, Atlande, 2015.

Vincent CARRAUD, « Le dessein de Pascal : *De la vraie religion* ou une apologétique de la douceur », in *Chronique de Port-Royal*, n° 63, 2013, p. 45-66.

Pol ERNST, *Les Pensées de Pascal, géologie et stratigraphie*, Paris-Oxford, Universitas-Voltaire Foundation, 1996.

Henri GOUHIER, *Blaise Pascal : commentaires*, Paris, Vrin, 1971.

Masamitsu HORINO, « Les trois écrits que la 'plurilecture' a permis de reconstituer à partir du manuscrit de *Divertissement* », in *Courrier du CIBP*, n° 36, 2014, p. 13-23.

—— « Introduction aux études génétiques sur les *Copies* des *Pensées* de Pascal »,『京都産業大学論集』人文学系列 51 号 , 2018 年 3 月 , p. 349-363.

前田陽一『パスカル「パンセ」注解　第一』岩波書店、1980 年 .

Jean MESNARD, « Aux origines de l'édition des *Pensées* : les deux copies », in *Les Pensées de Pascal ont trois cents ans*, Clermont-Ferrand, G. de Bussac, 1971.

—— *Les Pensées de Pascal*, 2e édition, revue et augmentée, Paris, SEDES, 1993 ; « Introduction : L'édition des *Pensées* », p. 15-55.

—— « L'ordre dans les *Pensées* », in *XVIIe siècle*, n° 261, octobre 2013.

永瀬春男「書物の運命——日仏の『パスカル全集』について」,『流域』青山社、78 号、2016 年 4 月、p. 27-35.

Blaise PASCAL, *Œuvres complètes*, tomes I-IV, éd. Jean MESNARD, Paris, DDB, 1964-1992 [略号 ***MES***].

—— *Pensées*, in Pascal, *Œuvres*, II, éd. Michel LE GUERN, Paris, Gallimard, « Pléiade », 2000 [略号 ***LG***].

—— *Pensées*, in Pascal, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par G. FERREYROLLES et Ph. SELLIER, Paris, Librairie Générale Française, « La Pochothèque », 2004 [略号 ***FS***].

—— *Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets*, étude et édition comparative de l'édition originale avec les copies et les versions modernes par Jean-Robert ARMOGATHE et Daniel BLOT, Paris, H. Champion, 2011 [略号 ***PR***].

—— *L'Édition électronique des Pensées*, site créé par Dominique DESCOTES et Gilles PROUST, 2011, http://www.penseedepascal.fr [略号 ***EEP***].

『メナール版パスカル全集』赤木昭三・支倉崇晴・広田昌義・塩川徹也編、白水社、1993-1994 年、第 1・2 巻 .

Gilles PROUST, « Les Copies des *Pensées* », in *Courrier du CIBP*, n° 32, 2010, p. 4-43.

塩川徹也訳、パスカル『パンセ』岩波文庫、2015-2016 年、上中下巻 .

Laurent SUSINI, *L'Écriture de Pascal : La lumière et le feu. La « vraie éloquence » à l'œuvre dans les Pensées*, Paris, H. Champion, 2008.

Laurent THIROUIN, *Pascal ou le défaut de la méthode. Lecture des Pensées selon leur ordre*, Paris, H. Champion, 2015 ; III, 1 « Les premières liasses des *Pensées* : architecture et signification », p. 71-98 ; III, 6 « Le pari au départ de l'apologie », p. 177-192 ; III, 8 « Se divertir, se convertir », p. 213-232.